



中等教育問題のトータルな把握をめざす

柴田義松・長尾十三二・吉田昇編

『中等教育原理』

本書は、編者「まえがき」(長尾)によれば、「日本の教育現実に対して学生の眼を開かせるような、そしてその教育現実に対して原理的な考察の力を育てるような」講義がおこなわれることを期待して企画、編集されたテキストないし参考書である。編者もいうように、「無性格な入門書」ないし「How to」的テキスト、とりわけ、実質において初等教育原理にすぎないものが教育原理を「借称」(編者)している書物が多いことを思うとき、中等教育に焦点をあわせた教育原理について、前述のような企図の書物が編まれたことの意義は大きい。(念のためにいえば、教員免許状取得のために修得すべき科目等を定めている教育職員免

許法施行規則には、

「中等教育原理」なる

科目はないが、「中

学校又は高等学校の

教諭の普通免許状を

受ける場合の教育原

理、教育心理学、青

年心理学、教科教育

法及び教育実習は、

中学校及び高等学校の教育を中心とする

ものとする」とされている。このよう

な編者の企図は、1章 中等教育の課題

(雅井正久)、2章 中等教育の2つの型

(長尾十三二)、3章 日本における中等

教育の展開(佐藤秀夫)、4章 中等教

育の社会的性格(小川利夫)、5章 青年

期教育としての中等教育(鈴木真理・末

本誠)、6章 中等教育の教育課程(宮坂

広作)、7章 学力差の問題(太田政男)、

8章 中等教育における集団の役割(峰

屋慶)、9章 授業展開の工夫(三枝孝

弘)、10章 教師の教育観の確立(中内敏

夫)という章立てにも表われている。と

りわけこの点で、今次の中・高の学習指

導要領改訂にみられる「非八教育」の思

想」から説きおこし、「生徒を発達の相

においてみる」こと、「教師集団の形成」

の重要性、「地域と教師」との関係を説

いた10章は、新鮮な問題意識を読みとる

ことができて興味深いものがあつた。章

の順序に意味があるなら、この10章は、

いちばん最初にもってくるべきだったよ

うに思われる。

ところで本書は、大学生向きの教科書

ないし参考書として編まれているので、

評者としてはこの面から意見を述べた

い。

がんらいテキストなるものには、著者

の一定の見地から、学問等の当該の分

野の研究の全領域にわたって、その到達

点と問題点を、一定の紙幅のなかで、

正確かつ簡潔に叙述することが要請され

ている。しばしば叙述が平板になりがち

なのは、テキストだからではなく、著者

の見地の積極的な主張がなかったり明確

でなかったりするからであり、学問的に

も名著といわれ、標準的といわれるテキ

ストが容易に生まれないのは、広範な領

域にわたって自己の見地を貫くことが、

常人のよくなし得るところではないから

であろう。

他方、近年は、学生のノートのとり方が上手でなくなつたこと、こういう学生たちに半ば強制的に買わせるならば確実に一定量は売れるという出版社の企画とのからみで、テキストと銘うった書物がふえている。こうして安易につくり出される「無性格な入門書」ないし how to 的テキストにたいする疑念は強まっております、大学教員の採用や昇格のための業績審査に際して、テキストなるものについては一律にこれを学問的業績とは認めないという基準を採用する大学・学部がふえている。

一律に業績と認めないというのでは、よいテキストが生まれる道をふさいでしまふから行き過ぎといえようが、テキストなるものあり方が問われていることは否めない。

こうした点からみて、今日、はなはだ安易に使われ、そのために問題の所在があいまいにされている「中等教育」の意義を歴史的に解明しようとしている1章、2章、かつては(旧制)中学校のみに限定されていた中等教育が、次第に中

等程度の実学教育をも含み込んで新たな中等教育として発展するといわが国の中等教育の歴史を統一的にとらえることを企図している3章、いわゆる学力差を、問題点の羅列的説明にとどめず、教育政策や教師の意識——これもまた社会的存在である——との関連において構造的にとらえる努力をしている7章、10章などの諸章は、今日の中等教育研究の眉の課題を適格にとらえているし、かつその「原理的な考察」は近年の研究水準を凌駕しているといふことができよう。

その反面、今日の中等教育研究のたらくれをそのまま反映して、問題の羅列的解説や、事実上は現実に眼を覆つて諸説の平板な紹介に終始している章も少なくないことも認めなくてはならない。

がんらい学問研究の発展は不均等である。中等教育の教育課程論、高校職業教育論、高校の授業研究、評価の問題、高校教育と大学入試制度との関係などのように、このテキストの課題に照らして若干の領域における研究の欠落や蓄積の薄さが露呈することは避け難いから、担当した筆者らの苦衷は察するにあまりあ

る。

しかし、その研究のおくれ、欠落自体を大胆に指摘すること、その問題を掘り下げ、そして半歩でも一歩でも踏み込むことがこのテキストに課された課題だったのではないだろうか。一例をあげれば、本書の全体をとおして、中学校教育の位置づけ、中学校教育に固有の問題についての記述の欠落がひどく目立つ。

これもほんの一例だが、高校では発足以来「ホームルーム」なのに、中学校では「ホームルーム」→「学級活動」→「学級会活動」と変わってきた事実経過には、教育課程行政の変化だけでは説明しきれない中学校教育に固有の問題、不安定さ、が示唆されているように思われる。中等学校の教師が教科指導と教科外の諸活動の指導の関係をどう理解するかは重要な意味をもっているので、「原理的」にときあかして欲しかった点の一つである。

△B6判・二四一頁・二二〇〇円、有斐閣▽
(佐々木孝||名古屋大学)